

日本にとっての「満州」とは

寺本 康俊

戦後世代の若い人たち、特に昭和後半期や平成生まれの人々にとっては、「満州」や日中戦争、太平洋戦争は、現実感がなく、歴史的な語句になっているのかもしれない。そうした言葉を実際に聞くこともある。しかし、よく考えてみれば、日本国内のみならず海外にも戦争の傷跡は至る所にあり、戦争の被害、影響を受けた人々の例を数えあげると枚挙にいとまがない。その意味では、いまだに「戦争は終わった」とは言えないのではないか。

私はこれまで満州開拓団の方々の方々のさまざまな手記、記録を読ませていただく機会があったが、それはまさに筆舌に尽くしがたいとしか形容できない悲劇が記載されていた。

この夏、私は、ドキュメンタリー映画「嗚呼 満蒙開拓団」を鑑賞することができた。戦前から戦中にかけて満州に開拓団として入植した人々がソ連の宣戦布告後から終戦直後の想像を絶する過酷な状況の中で引き揚げをした当時の様子が想起され、当時の悲惨な状況を彷彿とさせるものがあった。また、このたび、中国東北地方黒竜江省に方正地区日本人公墓、麻山地区日本人公墓や中国養父母公墓が建立されていることも初めて知った。

私はこれまでに中国のハルビン、瀋陽、北京、南京などの歴史資料館を訪問し、満州事変以降の日本の軍事や政治外交の在り方を改めて考えさせられる機会を得てきたが、この満州開拓団のことは、別の意味で、私に戦前期日本外交の在り方を考えさせた。つまり、満州への植民政策は、昭和初期、最初は「武装移民」という形をとらざるを得なかったが、このことは既に将来、満州国が崩壊に瀕した時の危険を予見させるものがあり、また他国の主権や国民を顧みない自国本位の政策がもたらした結果が、満州開拓団の無辜の人々の悲劇的結末をもたらしたと思われ、誠に残念である。

歴史の事象を検討する際、時折、「歴史のあと知恵」という批判を耳にするが、私は、そうではなく、後世の指導者や国民が、過去の歴史的な事象について種々検討を重ね、「歴史の教訓」を得ることで、人類が繰り返しがちな失策や戦争などを未然に防ぐことができ、より良い現在や未来の世界を構築することができるのではないかと、常々考えている。

私は昭和28年生まれの戦後世代であるが、私たちは日本人公墓が物語る満蒙開拓団の結成と消滅に至る歴史的経緯を知り、日中関係者の熱心な発意と中国省政府等の協力の下でこの公墓が作られたということを認識することが大切だと思う。

現在の日中関係においても、歴史を直視し、未来に向かうことが唱えられているが、日本にとって、これまでの歴史を検証し、お互いの民族を尊敬して、今後の中国、朝鮮半島、アジアの国々との友好的な交流を図っていかねばならないと思う。

(てらもと・やすとし、1953年生れ、広島大学大学院教授。戦前・戦後の日本の外交史、現代の日本の対中国・朝鮮の外交政策を研究。今夏、広島で『嗚呼 満蒙開拓団』を観る)